

元気おおとよは、
大豊町を元気にする民間の団体です！

2021 春号

元気おおとよ新聞

令和3年4月1日発行No.33
特定非営利活動法人
元気おおとよ
<http://www.genki-otoyo.org>
お問合わせ080-8635-2253

シリーズ 集落活動センター vol.1 東豊永集落活動センター

～大豊町内に5カ所ある、集落活動センターの取り組みをシリーズで紹介していきます～



その甲斐あってか、遠くは岡山や四国各県から町内の方も多くみえられ、目標1,000人に対して1,300人(2/26日現在)の来場者があり、大豊町の町花でもある「福寿草の里」はみんなで守られているんだなあ、というふうに感じました。

東豊永集落活動センターの主な取り組み

東豊永集落活動センターの主な取り組みは、福寿草祭りの開催以外に、年2回の道路整備(大滝～中内)、山の再造林(杉の植林)、若い世代の交流の場づくり、等です。(大滝～中内)の道路整備に関しては、ほとんど利用する人もいない箇所ですが、いざという時の迂回路として整備しておく必要がある、とのことでした。山の整備に関しては、獣害・災害・集落環境など町内全域において同じような課題をかかえていることと思いますので、他の地域でも参考になるのではと感じました。また、昨年からのコロナ感染拡大をきっかけに、ビデオ通話などの新しい通信手段が急速に発達し、日常化しつつあります。若い世代に限らず新しい交流の仕方にチャレンジするいい機会かもしれません。

現在7集落の賛同を得て、集落活動センターとして成立していますが、実際に活動に参加できなくても、応援する気持ちやサポート程度の個人も含めて3年間で150名のメンバーがいるそうです。いずれは13集落全ての賛同を得られることを目標に、活動を続けていくとのことでした。

最後に、氏原学センター長からメッセージです。

“集落活動センターの設立は、いろんな取り組みの中の一つの選択肢であり、きっかけづくりにすぎません。様々な課題はありますが、集落の垣根を越えて、広い視点で、みんなで楽しくかつ元気にやりましょう！”
(野田由美子)

小雨が降る2月の終わり、「福寿草の里」の受付ボックスの中で

東豊永集落活動センターの氏原学センター長にお話を伺いました。3年前、約30年の歴史を持つ「福寿草祭り」が、地域の高齢化や人手不足が理由で幕を閉じたときは、とても残念に思った方も多かった事でしょう。2年間放置した結果、福寿草の群生地や南大王集落内は荒れ始めていたそうです。生活環境を維持するためには、イベントを復活して集落内の整備・意識を持つことが必要と考え、「福寿草を育てる会」と「東豊永集落活動センター」が協力してイベントを復活させたそうです。

今年はコロナ拡散防止のため、例年のような出店はなし(お茶の接待のみ)、他者との接触を極力避けるため、スタッフは2～3名のみ、受付と上部の囲炉裏端の2ヶ所に対応とのことで、並々ならぬご苦労がうかがえます。

移住者紹介コーナー 森本誠子さん家族



季節はもう春ですね。これを書いている3月上旬はまだ寒さが残っていますが少しずつ暖かくなるこの時期、筆者は何かとワクワクしてしまう今日このごろです。

さて、今回の移住者紹介はちょうど移住してきて1年が経とうとする森本家の方々を紹介いたします。

兵庫県たつの市出身の森本誠子(もりもとせいこ)さん(35歳)とお子さんの新太(あらた)くん(7歳)、大豊町に来て家族になった犬の銀次(ぎんじ)くん(1歳)です。

なぜ大豊町に？

生まれ育った兵庫県のたつの市も、昔は田んぼや川も近くにあって、私は自然に触れ合いながら育ったので、子供も自然の中で子育てがしたいという思いが昔からありました。でも、今は開発が進んで都会になってしまい、子供たちが自由に遊べる場所がなくなってしまって、子育てのために移住を決意しました。

沖縄や徳島も候補地だったんですが、自分はシングルマザーなので何かあった時にすぐ帰りやすい田舎を希望していて、その条件に合うのが大豊町でした。

そんな念願の子育て環境を得た訳ですが、

大豊町での暮らしはどうですか？

もうすぐ一年が経ちますが、とても満喫しています。地域の人もとても優しくしてもらってますし、山や川が近い暮らしはとても良いです。子供が小さい時に自然にいっぱい触れることで感性が育つと私は考えているので、そんな子育てができて、とても充実しています。



今はどんな仕事をされていますか？

私は看護師なのですが、嶺北地域の在宅医療介護連携推進事業のコーディネーターという仕事をしています。わかりやすく言うと、お年寄りが自宅で長く暮らせるようサポートする仕事ですね。今までも看護師をしてきたのでその経験を活かせる仕事ですし、地域のお年寄りの人たちのためになる仕事なのでやりがいを感じています。

趣味やこっちに来てハマっている事はあるですか？

サーフィニングが趣味です。これまでも色んなところに行っていたのですが、やっぱり高知の波はいいですね。サーファーの間では、高知の海は憧れの場所なので、時間を見つけては波乗りに行っています。子供と行く時は一緒にシュノーケリングも楽しんでいます。その上、普段は山暮らしを楽しんでいますから、大豊町はとても良いところですね。



すごく大豊町を気に入ってくれているようですが、

困ったことや不便に思ったことはありませんか？

それが、困ったことに何もありません(笑) まだ1年しかたっていないものもありますが、近くにスーパーもあるし、隣町まで行けば基本的なお店は揃っているので不便を感じたい事はないですね。

最後に今後の展望や、大豊町でやってみたいことはありますか？

もう少し子育てが落ち着いたら、お日様の下で働く仕事がしたいです。それこそ農業とか。でも今は子育てに集中したいので今の仕事を頑張りたいです。のんびりした今の生活をを続けつつ、山暮らしの知識なんかも学んでいけたら良いなと思っています。

2人とも大豊町をとても気に入ってくれているようで、筆者としてもとても嬉しかったですね。移住してから家族になった愛犬の銀次くんも取材中、私の膝に乗って来てくれたりと可愛かったです。息子さんの新太くん、やりたいことはある？と聞くと、「オリンピックに出たい！！」と言っていたので、将来、大豊町からオリンピック選手が出たらいいなと少し期待しつつ取材を終えさせていただきました。ありがとうございました。(猪野大助)

そば物語 ～そば打ち編～

今回はそば物語～そば打ち編～報告です。新型コロナウイルス感染症対策を実施して開催しました。初めてのことで、参加者にもご協力いただき、無事に終えることができました。ありがとうございました。

通常は2～3人のグループで1セットの道具を使い体験してもらうのですが、コロナ対策として一人ずつ4人前を打ってもらいました。そのため水の加減や、練り作業がなかなか一人では大変そうでしたが、出来上がったソバは一人一人個性もあり良い出来でした。例年行っている試食会はできませんでしたが、みなさんお家で楽しんでもらったのではないかと思います。

今年度のそば物語(4回)は、栽培方法を一から変えてチャレンジしましたが、味もよく、とても良い出来でした。また、栽培からソバ打ちまで参加いただいた方もいて、とても有意義なイベントとして終えることができたと思います。次回のご参加もお待ちしています。(中平拓海)



ピックアップ in ままもと

お詫びと訂正: 前号のNPO新聞に掲載した写真(マージャン大会)で、高橋大先生の位置をトロフィの左と紹介しましたが、正しくは秋山信吉先生の左隣でした。お詫びして訂正させていただきます。

東豊永での幼少期

雄彦先生は、保育から小学3年生まで二人のお姉さんに囲まれて伸びやかに過ごされたそうです。チャンバラ遊びや(学校にプールがなく)夏には前の川で泳いだことなど懐かしく楽しい思い出とのことでした。また、新しい学校への引っ越しの時には、みんなでイスを担いで移ったこと、住宅に住んでいた佐竹先生や独身できれいだった中村先生の名前などが出てきました。おちゃめたっぴりの写真は、保育所時代の「おたんじょう、おめでとう」のカードにはさまれていたものです。雄彦先生は左から二人目。他の5人の中で思い当たる人もいるのではないのでしょうか。

左から二人目のおちゃめな笑顔の雄彦先生



2つのふるさとへ

東京での大学、大学院時代、アルバイトも経験しながらの研修医を経て大学病院での勤務に就きました。経験したことは、ここまでやるかと思われる検査の多さに加え、組織人としての対応がいやがうえにも要求される感じがして、これは性に合わない戸惑いを覚えたりしていました。その頃、土佐町の田岡病院の院長先生から雄彦先生へ直接電話がかかってきました。お父さんの肺に影が見える。癌かもしれないという内容だったそうです。後になって思えば、自分を呼び戻すために少しオーバーな表現を使ったのではと思うこともあるのですが、とにかく帰省しました。そして、現在に至っています。その時の心境をうかがうと次の2つが答えとして返ってきました。一つは、恩返し。大きく見え、言葉で表せないくらい良くしてもらった「オヤジへの恩返し」。もう一つは地域の住民の方々へ貢献したいという気持ち。人生の大きな分岐点にお父さんと大豊という地域の存在があったということで、お話を聞きながらありがたく心動かされたことでした。

空き家・山林などの有効活用
賃貸・売却希望の家や土地、整備したい山林、などありましたらご相談ください。

お問い合わせは、
080-8635-2253 (野田) まで



高橋医院・大田口医院 (その2)



高橋医院の診察室での康彦先生(大先生)

余話一題

お叱りを承知して閑話を一題。夜も静まった頃、大田口医院の前を通ったことがありました。灯りが見えます。職員か先生が事務などのお仕事をしているのだろうと想像していました。今度の機会にそのことをお尋ねしたところ、「私が泊まっています」とのことビックリ。お部屋も見せていただきました。聞けば、6日間の勤務中4日泊まっているとのこと。またまたビックリ。通勤のこともあると思いますが、夜間も開業医の先生がおい出してくれる、本当にありがたいことです。後日のある月曜日、先生の奥様が両手に重そうなかごを持って病院に入って行くのを見かけました。かごからゴボウが顔を出していました。

我々が田口医院・高橋医院

先の高知新聞に、県西部の町で医師を一戸建ての住宅を用意して募集しているとの記事がありました。また、テレビで県外の小さな町の開業医のドキュメント番組がありました。高齢のお医者さんの勤務ぶりや生活、住民との交流、ラストでは患者さんの最期を看取る場面などが温かく淡々と映し出されました。大田口医院の待合室に聞こえて来る診察室での雄彦先生と患者さんとのやり取りが重なりました。テレビで、地域の病院は親や空気の存在と似ているという言葉。なくなってからその価値の大きさが分かる。あって当たり前と思わないようにふだんから大事に見守っていくことが大切だということでした。しごく納得でした。



高橋雄彦先生と看護師さん、事務員さん

先生はじめ職員さんも穏やかで風通しの良さを感じさせてくれる明るい病院ですが、今回お話をうかがって最も感じたことは、雄彦先生の心の芯にある大先生や病院への想いとか矜持(きょうじ)というものでした。「父が開業した病院、それをしっかりと受け継ぐことが私の責任と務めであり、しまいも自分できちんと果たしたい」と述べられました。決して大きな言葉ではありませんが、揺るぎのない真摯なお言葉で、住民の一人としてありがたく嬉しくお聞きしました。最後に医学の道を歩まれているご子息(大田口小学校で学んだことのある長男さん)の将来のことをうかがうと、それは息子本人に任せたいとのこと、かすかに浮かんできた三代目という言葉は胸に仕舞い込みました。先生の今後の末長いご健康を心からお祈りして、さわやかな気持ちで医院を後にしました。先生、スタッフのみなさん、ありがとうございました。(鄙)